



アラカルト

VDEh 創立150周年を祝して

—『150 Jahren VDEh 1860-2010』刊行—

The 150th Anniversary of the VDEh

— Publication of the Book *150 Jahre VDEh 1860-2010* —

永瀬ライマー桂子

ボーfum・ルール大学

Keiko Nagase-Reimer

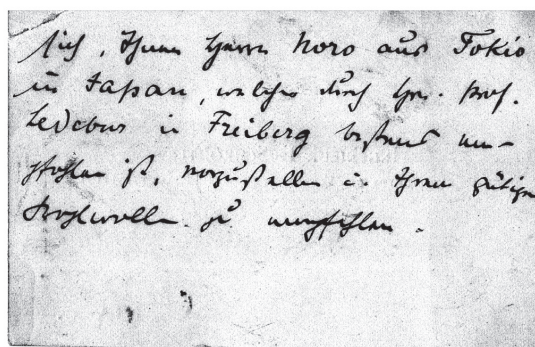
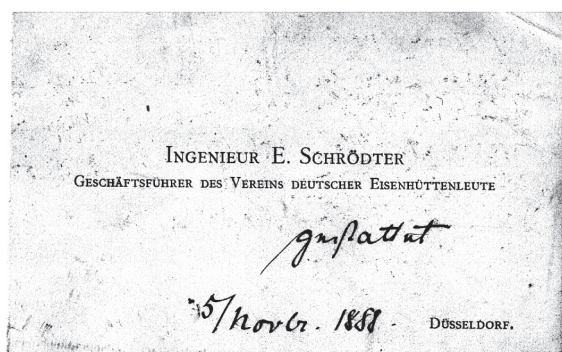
昨年十月、VDEh（ドイツ鉄鋼協会、Verein Deutscher Eisenhüttnleute）は創立150周年を迎え、盛大な祝賀会が催された。この祝賀会にあわせ、VDEh150年の歴史を総括する『150 Jahre Stahlinstitut VDEh 1860-2010』が刊行された。この900ページを超える論文集は、三十人あまりの技術史家・歴史家・VDEh関係者らの手によるもので、VDEhの歴史が、政治経済、国際関係、文化、他機関との関係などの側面から描かれている。著者も末席を汚させていただき、日本との関係について執筆した。ここで短く、その内容を紹介したい。

鉄鋼業界における日本とドイツの関係は、「師弟関係」からはじまった。西欧の技術を積極的に取り入れはじめた明治時代、ドイツが日本の冶金学に与えた影響は大きい。例えば招聘された「御雇外国人」教師の中には、ドイツ人クルト・ネットーがあり、彼は小坂鉱山を経て、東京大学理学部採鉱冶金学科で教鞭をとり、多くの技術者を育てた。また、当時世界の鉱山冶金教育の中心だったドイツのフライベルク鉱山学校には、多くの日本人が留学し、鉄の世界的権威レーデブアらの元で学んだ。彼らは帰国後、日本の鉱山冶金学界のトップに立って活躍した。

続いて明治政府は、官営八幡製鉄所の建設を計画し、ドイツ

ツから技術移転を行った。建設・稼動に際して日本人技術者がドイツへ研修に赴き、またドイツ人技術者が日本に派遣されたが、事は簡単には運ばなかった。日独間では、社会的経済的諸条件が違い、原料が違い、さらに労働モラルや技術を受け入れる土壌が違った。そのため、ドイツの技術をそのまま移転しようとしても無理だった。ドイツ人技術者が、日本の諸条件を深く理解していたわけではなかったから、ドイツの技術を日本に合った形に応用するのにも限度があった。そのような状況下で、日本の鉄鋼国産化を牽引していったのは、野呂景義のような、フライベルクに留学経験を持つ日本人技術者だった。彼らは、西欧の技術を学び、体験し、消化した上で、それを日本にフィットする形で導入していった。

第一次世界大戦が勃発すると、ヨーロッパ内で鉄の需要が高まり、日本への鉄の輸出が滞った。これをきっかけに日本国内での生産が振興し、日本は「生徒」役から「自立期」に入る。1915年の日本鉄鋼協会の創立は、この「自立期」スタートのシンボルとも言えよう。VDEhが日本鉄鋼協会に与えた影響は、はしばしに見られる。例えば、創立にあたって今泉嘉一郎は「(VDEhは)我日本鉄鋼協会の亀鑑とするに足る可きものならん」と述べている。また、偶然かもしれないが、日



VDEhのCEOだったシュレッドターが1888年に野呂景義に渡した推薦状。当時は名刺の裏に書くのが普通だったようだ。(科学史技術史研究所蔵)

本鉄鋼協会の機関誌は、VDEh の機関誌『Stahl und Eisen』（日本語に直訳すると『鉄と鋼』）と同名がつけられた。

第一次世界大戦後も引き続き、ドイツ人技術者が日本に招聘されたが、日本側が彼らに求めたものは、以前とは明らかに異なってきた。ネッターが来日した頃、日本人はドイツ人技術者に対し、学術的なものを含む知識全般を要求していたのに対し、約 50 年経過したこの頃は、利益をもたらす効率の良い技術・経営コンサルティングを求めるようになっていた。

第二次世界大戦後、日本はドイツからではなく、主にアメリカから技術を導入し、1960 年代には欧米の水準に追いついた。そしてついに 1964 年には、日本の粗鋼生産量がドイツのそれを上回った。以降、日本とドイツはよき「パートナー」としての関係を築き、様々な交流を行ってきた。例えば技術者交換研修は、1960 年代、当時協会の専務理事だった田畑新太郎氏とクレックナー社のヴィルヘルム・ヘーメイヤー氏の個人的な交友関係が発端となってスタートした。当時ドイツ人技術者は、日本の LD コンバーターに大きな関心を抱いていたようである。また、1970 年代からは、定期的に日独セミナーが開催され、学術的な情報交換の場となった（現在も継続しており、2009 年 11 月に第 13 回が開催されている）。その他、視察旅行もたびたび行われた。ドイツ人技術者の間では、

海外から輸入された鉾石を臨海部の大規模な工場で製鉄加工し、そこから直接輸出する、といった日本のシステムの視察が人気だった。というのは、ドイツの製鉄工場の立地条件はこれとは全く異なり、多くは鉾山に近い内陸部にあったからである。一方日本からの視察団は、1960 年代から VDEh の推進もあってドイツでさかんに行われていた産学連携に、関心を持っていたようだ。

今日、インドなどが鉄鋼業界で台頭する中、将来の技術発展について、また目下の研究開発に関して、日独両国が似た考えを持ち、引き続きよき「パートナー」としての関係を保っていることは、皆様ご存知の通りである。

参考文献

- 1) Keiko Nagase-Reimer : Wichtige Brücken nach Japan gebaut. “Der Verein Deutscher Eisenhüttenleute und die Beziehungen zu Japan”. In : Maier, Helmut; Zilt, Andreas; Rasch, Manfred (Hg.). *150 Jahre Stahlinstitut VDEh 1860-2010*. Klartext Verlag : Essen, (2010) , 411-433.

(2011 年 3 月 29 日受付)